



四国防災八十八話

第四十三話 長女が津波に奪われた

監修・著作：愛媛大学防災情報研究センター

作画：松尾 美佳（高知大学防災すけっと隊）

山本 阿子（高知大学防災すけっと隊）

高知県のとある町に、ひとつの家族が住んでいました。

1946年12月21日、この日も一家はいつもと変わらず、
布団を並べて寝ていました。

姉のサトコと弟のクニオも
いつものように仲良く寝ていました。

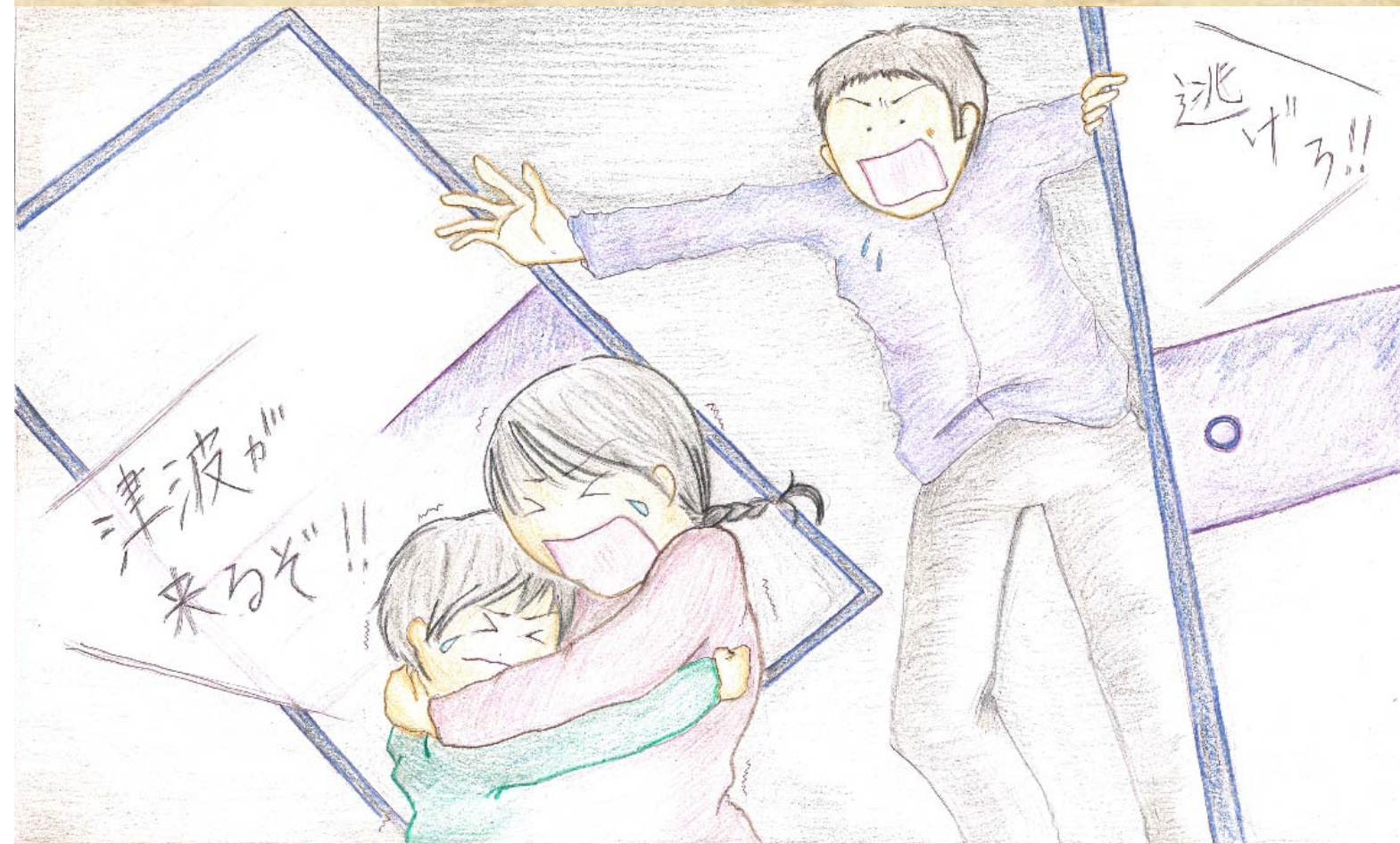
そして、朝方4時ごろ・・・



ドーンという地鳴りがし、
床から突き上げるような揺れで
家族は目を覚めました。

2人は、一体何が起こったのか分かりませんでした。
震動はなかなか止まりません。

“おねえちゃん・・・怖いよ・・・”



揺れがおさまったころ、
家の外は急に叫び声などで騒がしくなりました。

“助けてー”

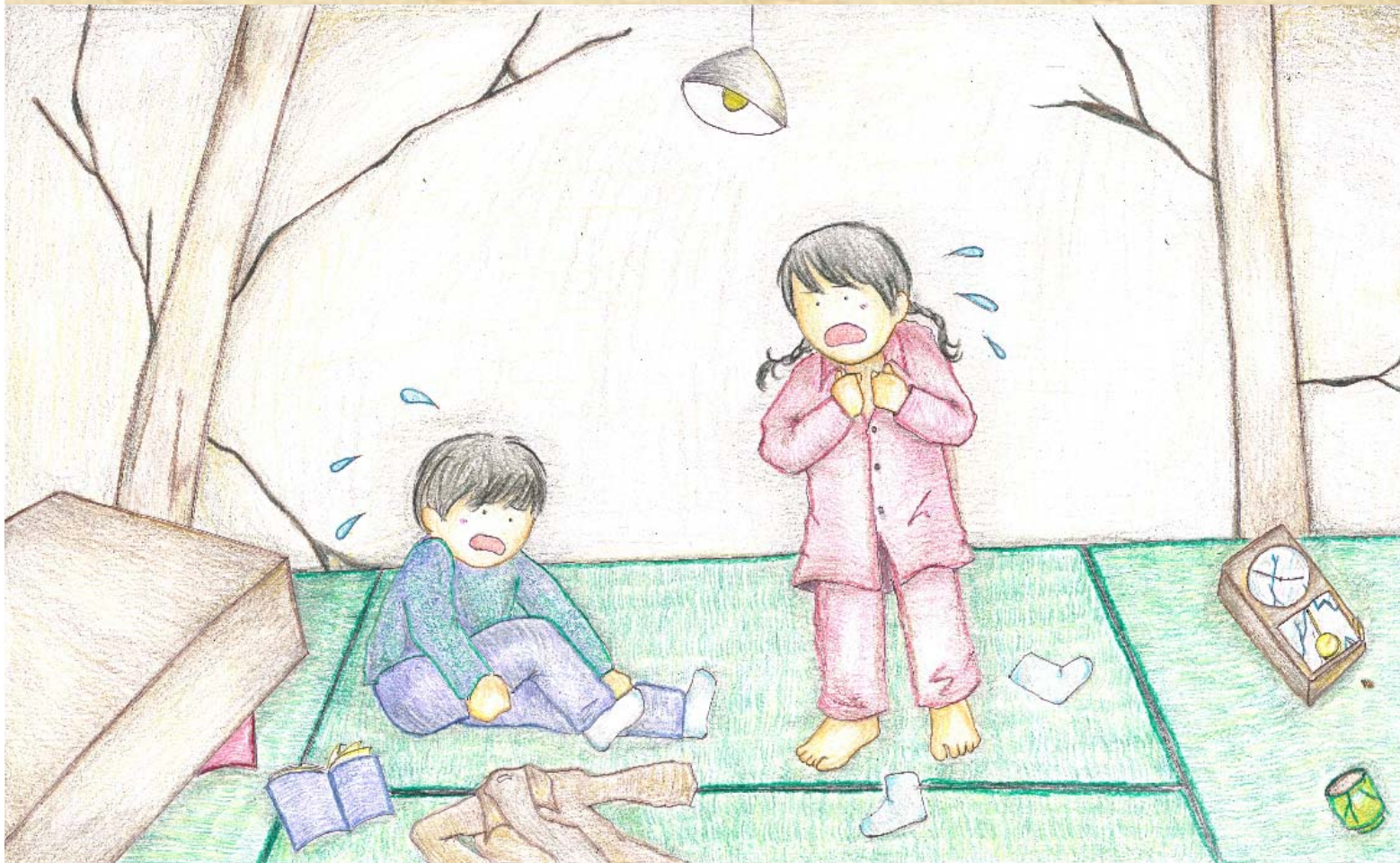
“おーい、津波ぞー。逃げよー!!”

と言う声が聞こえてきました。

恐怖で動けなくなっているサトコとクニオに、
お父さんは

“服を着替えて、
先におばあちゃんと山へ逃げろ!!”

と言いました。



**2人は、お父さんに言われた通りに、
着替えて逃げる準備をします。**

**しかし、暗くて着るものがなかなか見つかりません。
サトコはクニオを急かします。**

“クニオ、急いで!!”

**その頃、お父さんとお母さんは、
持ち出す荷物をまとめていました。**

**部屋の中は真っ暗で、
倒れた棚や、床に散らばったお皿などで、
必要な物を探すのが大変なようでした。**



ようやく、服を着替えたサトコとクニオは、おばあちゃんと一緒に家を出ました。

もう既に地震から10分ほど経っていました。家の外では、塀や電柱が倒れています。3人は、瓦礫を避けながら山を目指しました。

“おばあちゃん、大丈夫？”

“クニオ、そこ気を付けて・・・”

サトコは、みんなを気遣います。

しかし、その背後からは・・・



ゴゴゴゴオオオオオオ～

津波が迫っていました。

3人は必死で逃げましたが、
あっという間に波にのまれてしまい、
繋いでいた手は離れ、
ばらばらになってしまいました。

クニオは、

“お姉ちゃん、おばあちゃん”

と叫び続けました。

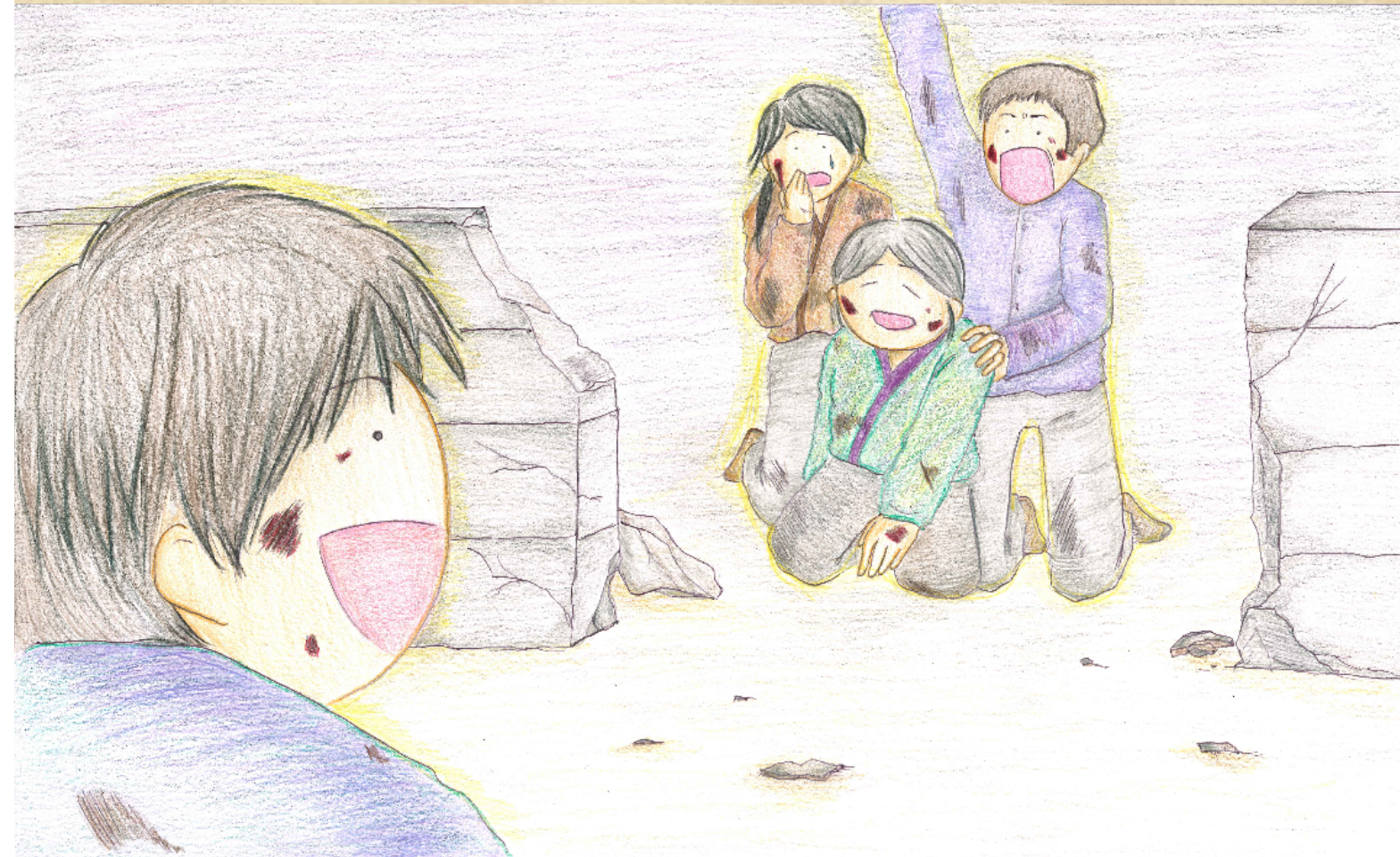


クニオは、波に流されながらも、
近くの電信柱に必死でしがみつきました。

次第に、水が引いてきましたが、
いつ次の波が襲ってくるのかわかりません。

“今のうちに、山へ行こう”

クニオはどうにか
山へ逃げることができました。



夜が明けたころ、
ようやく水が完全に引きました。

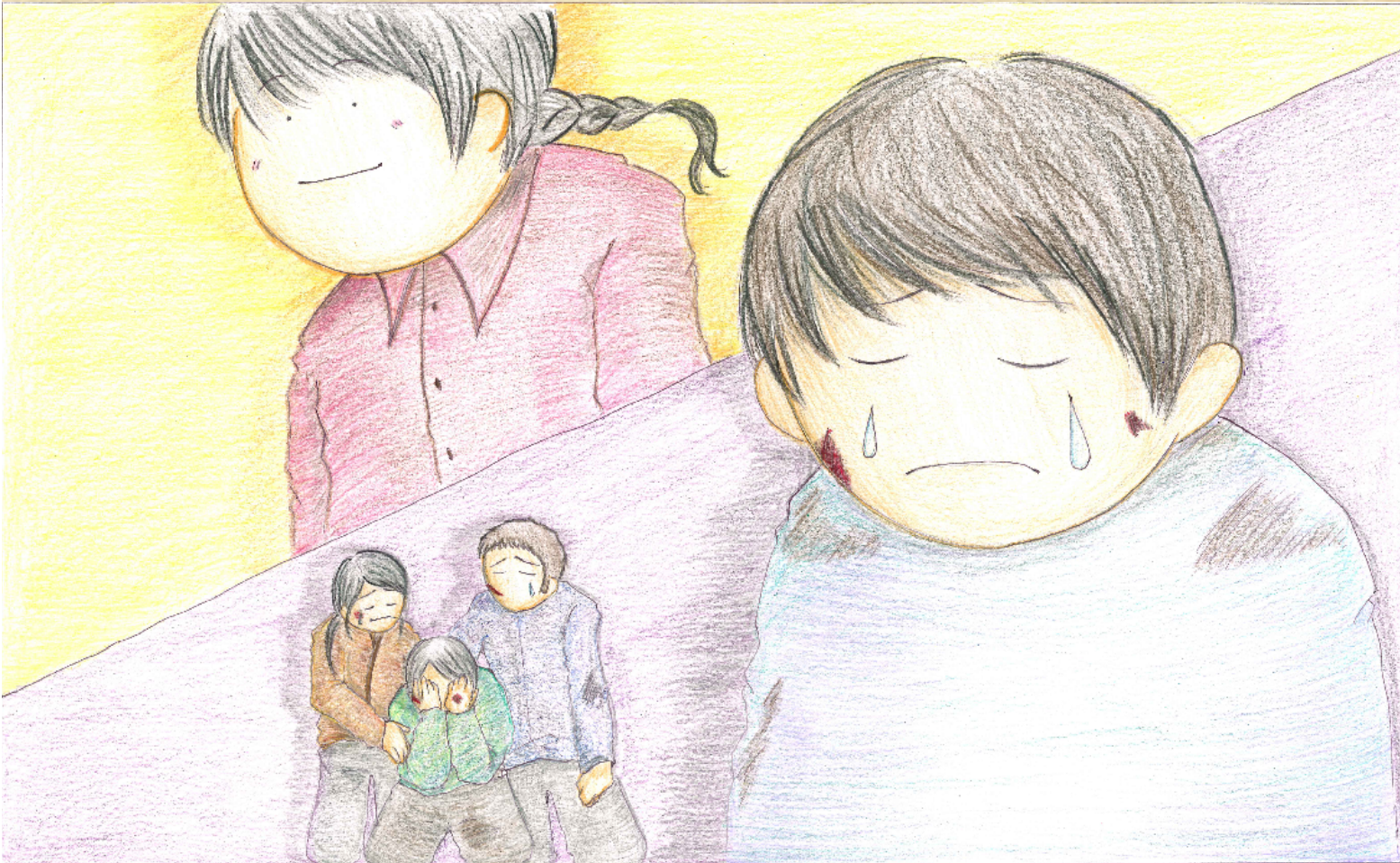
クニオは山を下り、家へと向かいました。

“みんな、大丈夫かなあ・・・？”

家は、波のせいで形はほとんど残っていませんでした。
でも、家の前には、お父さん、お母さん、
そしておばあちゃんが座っていました。

“クニオ!! 無事だったか。”

お父さんが、叫びました。
両親は、家の屋根に登って津波から逃れ、
おばあちゃんも近くの家の屋根にはい上がって、
潮が引くのを待っていたそうです。



“あれ？お姉ちゃんはどこ？”

とクニオが言いました。
家族は静まりかえりました。

サトコは津波にのまれ、行方が分からなくなっていたのです。
後日、サトコは家の近くで遺体となって発見されました。

あの時、みんなでもっと早く逃げていれば・・・

どんなに後悔しても、サトコはもう戻ってきません。
このことから、この町では、

地震がきたら何も持たずにすぐに逃げる

という教訓が残されています。